

入湯税から考えたこと

羅臼町立知床未来中学校 3年 芦崎 風葉

私は税金に対して、「人々が十分な生活を送っていくために国に納めなければいけないお金」だとか、「難しそう」というイメージを、正直持っている。そんな税金について、この作文を書くために色々調べていると、一つ、目を引く情報に出会うことができた。それは「入湯税」という税金だ。

聞き慣れない名前の税金に興味を持った私は、入湯税について詳しく調べてみた。調べた結果、入湯税とは「市町村が温泉施設を運用し、施設の整備や観光促進などの温泉に関する目的でかかる費用を、温泉の利用客に負担してもらうための税金」であることがわかった。つまり、温泉による、温泉のための税金といえる。また、入湯税は国に納める「国税」ではなく、市町村に納められる「地方税」という税金にあたるようだ。税金は全て国に納められていると思っていたので、地方税の存在に驚いた。さらに、入湯税は「目的税」という、その税金の使い道が明確に決まっている税金であることもわかった。

入湯税のような、市町村を復興するための税金は、とても重要だと思う。日本は現在、地方の過疎化が進行している。私の住んでいる町も例外ではない。人口減少や過疎化が進むと、納税者の数が減る。すると、「町にお金がない」といった状況が生まれて、地域は行政維持のために予算を使うことに手一杯になり、その地域が誇れる特色を支援する経済的余裕がなくなってしまうのではないか。

そんな事態を防ぐために、私は、小さな村や町でその地域の背景を考慮した「地方税」を取り入れていくべきであると考えている。また、入湯税のように、税金とその目的の繋がりが明確で、地域の活性化につながる内容の税金であれば、人々からの理解を得やすくなると思う。例えば、人材不足や原材料の枯渇が問題となっている伝統的工芸品産業の支援資金の確保を目的として、工芸品の購入に応じて、工芸品支援税などを設けるのはどうだろうか。私はこのような地方税によって、衰退が進む地方を、特色の保護という観点から復興し、盛り上げることができると思う。

税金は、暮らしやすい国をつくるだけでなく、使い方次第で地方の活性化にも活用することができるはずだ。どんな地域でも、余すことなくその魅力をアピールしていくためには、税金の力がきっと必要になる。

今後、税金に関する社会の変化の中で必要なのは、一人ひとりの税金に対する理解と、これからの税制度について考える力だと思う。私は、日本のすべての地域が一つ残らず活気に溢れる未来を望む。だから、あらゆる可能性を持った税金について継続して調べ、理解し、これからの日本や、地域と税金の関わりについて、自分の考えを持つことを意識していきたい。